

語り部ニュース

平成二十一年七月号

発行 NPO法人舞鶴 引揚語りの会

人権講座実施「

京都府立東舞鶴高校二学年生

二六五名

平成二十一年六月十二日(金)

十四時十五分～十五時

東舞鶴高校体育館に於いて講演

パワーポイント使用

人権ゆかりの地といわれる舞鶴に生まれ育った一人として、また東高校の生徒として舞鶴で過去にどんな事があつたのか、皆さんにどうしても知っておいて欲しい事があります。

それは、あの「太平洋戦争」と舞鶴の「引揚げ」の話であります。と切り出し、パワーポイント「引揚げと人権」を解説しながら、舞鶴の五条棧橋の案内板、岸壁の母「妻のこと、舞鶴市民が暖かく迎えおもてなしの心」で全国各地へ送り出しました。こうした体験から過去の戦争の歴史を正しく学び取り、単なる歴史の一コマに終わるこ

となく「引揚げ」の史実を通して、平和の大切さを語り継ぎ、舞鶴から平和のメッセージを世界に向かつて発信する一役を担っている事を訴えておきました。沖縄修学旅行に際しては沖縄のこと、先の大戦で最大の激戦地となり多くの尊い命がなくなつた。ひめゆり



平和記念資料館を訪れた十七歳の女子高生の感想文のメッセージを朗読して終了しました。

人権学習の講師についてお礼状

NPO法人舞鶴 引揚語りの会

監事 村尾幸作様

京都府立東舞鶴高校

校長 福井秀之

日頃は本校の教育にご理解とご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

六月十二日の二学年人権学習「太平洋戦争と人権」～海外引揚げ・シベリア抑留を語り継ぐ～の実施に当たりましては、ご多用中にもかかわらず、高校生にもわかるように要点を押えたお話しをしていただき誠に有難うございました。

これからの時代を担うべく生徒達にとつては、自分の住んでいる町とかかわりの深い引揚げの歴史を学び、あらためて戦争や人間の尊厳について考える絶好の機会となりました。生徒達からは

「引揚記念館について感心がわいたので行ってみたい」「自分が思っていた以上に戦争が人を傷つけ、戦争の悲惨さがわかった」

戦争を経験した人が少なくなっている今、自分達が戦争について考える事が大切だ」

などの感想が寄せられ、生徒達も語り部の方々のお話をしっかりと受け止める事が出来たようでした。

末筆ながら、貴会の一層のご発展と会員の方々の益々の活躍をお祈りいたします。今後とも本校への変わらぬご支援とご協力のほどを宜しくお願い申し上げます。六月十五日)

講演報告

石原ふれあい・いきいきサロン「二
十一年六月二十日
場所 右原公会堂に於いて実施
参加六十名でした。

「シベリア抑留体験談」
戦争の悲惨さを伝えたい

こんな方が来館されました。

二乃湯参議院議員が六月七日に
来館され舞鶴市長はじめ市の幹
部の方達と色々お話し合いをされ
ました。二乃湯議員は総務委員
会に所属されていて先日、



シベリア抑留体験者二名から参
考人として説明と意見を受け当
舞鶴引揚記念館を見学された。
案内は中田理事長が致しまし

た。

カルトーシカ ツギガイモ
に思う 谷口久乃

梅雨に入りましたが空梅雨と
いうのかあまり雨が降らず。湿度
ばかり上がつて、蒸し暑い日が続い
てます。

そんな中、私は馬鈴薯 カルトー
シカ)の収穫をしました。

小さきさまざまな馬鈴薯をコンテナ
に入れながら、ふとシベリア抑留
者の人達の手記を思い出しました。

コルホーズ、ソホーズの手伝いに行
かされたとき、種芋を植えてゆく
とき、穴を掘る者、その穴に一つ
ずつ種芋を落す者、その後から土
をかける者と一列になつて作業を
するの、早く終わらせるカンチ
ヤイため一つの穴に〇個も〇個も
落したり、穴でないとところに落し
たりしたこと。でも芽が出始め、
不規則に芽が出てサボつた事がば
れて監視兵にひどく叱られた事。
また畑の端から端へ作業をしてゆ
くの、午前中にたどりつけなかつ

た広大な畑だったこと。収穫時、
取り残しの芋をズボンに入れて持
ち帰り、パチカで焼いて食べた話し
監視兵は少しくらいなら見てみ
ぬ振りをした。

冬の道で拾つた馬鈴薯は実は馬糞
だったなど悔しい思いをした話など
思い出しながら、私の馬鈴薯収穫
作業は〇時間ほどで終わつてしまつ
た。ピンポン玉くらいの物は、昨年
はゴミ袋に入れて捨てたものでし
たが、今年は捨てずに食べようと
思つてます。

同感、我が家も全部食料となり
ます。(豊田)

聞き取り部活動報告

樟 康

敗戦後の北朝鮮から、一俵のお米
と引換えにカムチャツカ行つた神蘭
清子さん 姫路市在住)への聞き取
り抜粋

『自分の体験を話したいといふ
方が居られるので、連絡を取つてみ
て下さい』と社会教育課から連絡を
貰つて姫路にお住まいの神蘭さんに
お電話を差し上げてから一年以上、

ようやく記念館にお迎えすること
が出来たのは、語りの会の総会が開
かれた、五月十六日でした。京都か
ら総会に参加された広橋さんもご
一緒に、記念館の案内もそこそこ
にお話を聞き始め気が付いたら、記
念館の閉館時間になっていました。
昭和三年三月十二日生まれという
ことです。八十一才、敗戦時かな
り成人しておられたので、定かでない記憶を頼りの我々に比べてどのお話もしっかりとしておられます。以下ご自身のお話を録音したものを整理させていただきました

昭和九年、小学校入学と同時に
鹿児島から、先に父の妹が渡つて
いた、北朝鮮の工業地帯興南市へい
きました。興南の小学校は一学年三
クラス、かなり大きい規模でした。
日本人ばかりですから、朝鮮語を
話す機会などありません。かわいそ
うだったのは、朝鮮人学校の子ども
たちで学校内では絶対に自国語を
使うことが許されませんでした。昭
和二十年八月ソ連が南下を始める
までは、B二九を遠くの方に見ても、
機雷が七個も落ちてきたこともあ
りましたが不発だったりして、さほ

ど不安なく過ごしていました。

敗戦を迎えたのは、高等小学校を卒業して、父と同じ火薬工場に勤めている時でした。

どこに隠していたのか、今の韓国の旗を持った朝鮮人達が大騒ぎ、踊りだす人さえいました。

これが、敗戦後の日本人の悲劇の始まりでした。その少し前からソ連軍の南下に伴って日本人の多くは追われるように南下を始め、子を置き去りにした親、老いた親を見放してきた子などそれは悲惨なものでした。自分たちが遠足に行った三角山

というところがこうした避難民や、市民の死体置き場になつて山のようになっていました。

やがて、住んでいた社宅を追い出され、もとは朝鮮人の従業員が住んでいたというバラックに移されました。日本人たちは常に警備兵に見張られているので身動きもならず、朝鮮へ渡つてから生まれた弟たちを含め6人の子どもと両親の八人家族はとにかく食べるものに困りました。一人千円でヤミ船を出してくるといふ話もありましたが、8人家族の八千円はとても出せません。

避難する時に、ようやく持ち出した父の紋付が、たゞ一升のお米(二円七十銭だつたと記憶しています)にしかならないくらいでした。配給で配られる稗(ひえ)は糞つまりになるので、汁だけ吸つてカスを吐くようにと言つても、幼い弟たちは空腹のために呑み込んでしまつて、母が綿棒で掻きだしていました。そんな中で、先ず母が発疹チフスにかかりその後私も発疹チフスになつて髪を切られてしまいました。

何より怖かつたのは、ソ連兵の強姦、後から聞いたところによると、ソ満国境から入つてきたソ連兵ほんどが囚人だつたせいでということですが、トラップに、品物も娘さんも片っ端から乗せて連れて行くなど、それはひどいものでした。ある新婚さんの家などへは、呂助三人ほど入つてきて、助けようとした主人の顔を拳銃の柄で殴り殺したことがあります。子どもたちはソ連兵が来ると空襲警報、空襲警報」と叫ぶことにし、とにかく泣き叫べど教えていました。ある夜、我が家にも呂助が戸をけ破つて入ってきました。妹は早々と屋根裏に逃げ込んだので

すが、私は腰が抜けてしまつて、どうしても上に上がれないでいるうちに、ソ連兵が入つてきて、父親は銃を突きつけられてどうすることもできません。母は、私を抱え込みながら抱いていた一番下の弟のお尻をつねつてはわざと泣かせようとしてしました。おかあさん、ぼく、何も悪いこととしてないのにどうしてつねるの」と弟は泣き叫びます。そうしているうちに大きいほうの弟が、そこにあつたふろ釜を思い切りガンガン叩きました。すると急に呂助があきらめて出て行つてくれたのです。自分たちの悪行が、彼らの上官、憲兵などに知られたら、銃殺になってしまうので、ばれるのが怖かつたのでしょう。とにかく危機一髪でした。

昭和二十一年になつて、樺太の農園に行けば、お米をひとり一俵をくれるという募集が始まりました。当初は、父親と娘二人で行くつもりでしたが、幼い弟たちを母親一人で行くのは不安なので、父親には残つてもらふことにしました。五月二十七日に出発、十二月五日までという契約で、興南から六一〇名、漢口から三五四名が応募していま

した。身寄りのない人や、元警官、憲兵、教師などが身分を隠して参加していました。一週間ほどでカムチャッカに着き、農業をすることになりました。缶詰工場や漁業に携わつた人たちもいました。向こうにいたソ連人も契約で来ていて、集団農場のようでした。

広いツンドラ地帯で見渡す限りの農場に、キャベツ、ジャガイモ、大根などを作っていました。牛が鋤のうなもので耕した後、ジャガイモを植えるのですが、一畝植えるのに半日、戻つてくるのに半日という位広いものでした。気候は、一瞬半そで過ぎせる夏のような季節もありましたが、十月にはもう畑にも出られないくらいの寒さでした。

建物は丸木で作られていて、隙間にはドンゴロを詰め、ストーブを焚いていました。燃料は柳の枝です。食事は最初は日本人のために船に積んできたというお米が出ていましたが、それが無くなつてからは黒パンでした。月に一度くらいは一キロくらい離れているところにいる男性たちがやつてきて演芸会が開かれたり、「体いつ日本に帰れるのだろうか」

という不安はありましたが、乱暴されるといったこともなく規律の中で守られていたように思います。

一度、一緒に行っていた朝鮮人の人たちの中で、洗濯物が盗まれるという事件がありました。敗戦後のこと、まずは日本人が疑われました。後日同じ朝鮮人が盗んでる所が見つかった、疑いが晴れましたが、もし日本人が疑われたままだったら、その後がもう大変だと思いました。

約束の十二月に入ったある日遠くの海に船が見えて、線香の煙のような細い煙が見えました。

薪を取りに行っていたところに、ソ連人のキヤテンが馬に乗ってやってきて、引揚が始まるからすぐ支度をするようにと言いました。もう薪も何もその場に捨てて、飛んで帰り仕度をしました。

まずは、荒れた海で小さな舟立ちのままに乗り二十人も乗ったでしようか)に乗って沖の船に乗りました。それから、まだ2度も船に乗り換えて、二十二年の元旦は軍港ペトロハバロスクで迎えました。

とにかく冬のオホーツク海は荒れに荒れて、行くときは一週間で

けたのに、四十日もかかりました。途中、樺太を通り、北海道が目の前でしたから、そこに降ろしてくれと船長に頼みましたが、契約が違うからと、日本を目の前にしながら朝鮮に向かいました。

たまたま一日に一度の食事を波にさらわれたり、『飯が食べたいね』と言っていたおじさんが、食事が来た時にはすでに死んでいるといったありさまで、何人もの人が亡くなりました。水葬もしましたが、終わりの方は甲板のトイレの近くにそのまま死体が置かれていて、夜などとても怖くてトイレにも行けませんでした。こうしてようやく入港したのは清津の港でした。

それから、また興南に移動しましたが、そこでもたくさんの方が亡くなりました。家族がどうなっているのかわかりません。しばらくして、私が高熱を出し、病院のようなどころに移されました。その時、遺髪用の髪まで取られました。そしてまた、折角伸びていた髪の毛を切られました。兵隊さんにどうしても嫌だと泣いて言いましたが僕をうらまなしで』と言われた坊主にされまし

た。

大安丸にて二十二年三月二十二日に佐世保に向かつて帰国、三日後に入港。四月の一日にそれぞれの故郷に向かいました。我が家に着いた時飛んできた母親と3人、泣くだけ泣きました。

第一声はおかあさんまた坊主になつて帰ってきましたでした。

父親たちは、二十一年の我々がカムチャツカに向かう少し後に帰国、仙崎に入港したそうです。

十七才と十六才の娘二人を残して帰国した父親たちは、帰国後周りの人に責められ、生きた心地がしなかったと言われます。帰国後も朝鮮から帰った女性に処女など居ないなどと言われ自分たちは無事に守つて帰ってきたのにと、とても嫌な思いをしました。

でも、自分の体験を話せるのは、何とか無事に帰られたからかもしれない。話が後先になります。我々がソ連兵に怯えて暮らしているとき、中には自ら体を売った人もいて、そのお陰で、一般の人が落ち着いて暮らせるようになったともいいます。私たちが危険な最中にいた頃、

日本の兵隊さんになんとか助けて下さい』と言ったところ、日本の兵隊は、もう酷いことをしたのだから、どうしようもない。中国では強姦した後は家族全員惨殺したくらいだから』と言われました。

何はともあれ、いろいろな危険をくぐつて生きて帰られたことに感謝し、まだまだ語りつくせないくらいですが、カムチャツカまでにも行った人がいることは存じない方が多いでしょうから、今日お話しした事は1人でも多くの方にお伝えしていただければいいと思っています。

連載

「兵卒のシベリア捕虜記

著者・門間祐太郎

編集・南澤 武

抑留、厳寒のシベリアへ

昭和二十年八月十八日午後、日本の敗戦がわかった時、一緒に働いていた満人労働者達は、皆が偶然新京近辺の同じ村の出身者だったので、口々に私に村に連れ帰つてソ連現ロシアから隠してあげる』と奨めてくれました。

しかし私は、例えば捕虜になつても、三五年も辛抱すれば帰国できる

だろう」と安易に考えて、腹を据えておりました。本当は 兵隊さん、あなた方は、このまま真直ぐ日本に帰れると思つてゐるようだが、ソ連人はそんな事は知りませんよ。恐らくシベリアの奥地に連れて行かれて、死ぬまで重労働をさせるでしょう」という口コミ情報が流れ、この事の方が当つていました。

始めて入隊したとき迎え入れられた、間頭の兵舎に今度は捕虜として収容されました。降伏したんじゃないぞ！ 一時停戦したのだ」等とまだ喚いていた職業軍人以外は旧部隊の階級制度のままで、ここで初めて捕虜生活が始まりました。昭和二十年九月初旬、各自が八日分の食料を持たされ、北方に向かって行軍する事になりました。浦塩（うらじお）近くから、内地に送り返されるのだ！」などという尤もらしいデマを信じて急に元氣を取り戻した人もいました。行軍中荷物がないとも重いので、あとでは、きつと困ると解つていましたが、少しでも軽くしたいと、この大事な食料、その中でも割合重い大豆やコウリヤンなどを捨ててしまったのです。

そのため最後の一日は小さな完結め一個を三回に分けて、雑草を混ぜて煮て食べ、飢えをやつと凌いだ始末でした。

もつとも、古参兵殿達は、部隊に割り当てられた荷馬車に、自分達仲間だけの防寒具や食料、部隊長殿の鉄製寝台までも持ち込んでいました。

八日目にはやつたどり着いた原っぱの周囲は、既に先に連れてこられた捕虜達が食料の足しにする野草や、焚き火に使う枯れ木や木屑を取り尽くしたあとでした。

厳寒に直面し大変な苦勞を重ねる事になりました。（つづく）

6月の活動実績

稼働日数 30 日
ガイド数 3,311 人
予約数 26 件
予約人数 1,047 人
稼働会員数 19 人
募金箱 57,461 円

寄付金

活動資金寄付者 芳名金二万円
静岡県馬飼野利雄氏より頂き

ました。有難く活動資金に活用させていただきます。

講演活動の予定

◎ 七月九日

宮津市立宮津中学校

人権学習 矢間の尊厳 舞鶴に学ぶ

（二年生）一〇三名 講師 中田

一三時十分より一四時三十分

◎ 七月十七日

社団）舞鶴青年会議所

十九時四十分より二十一時講師 中田

場所 舞鶴市政記念館メモリアルホール

◎ 七月二十六日

おおい町立名田庄図書館

第五回戦争を語る 講師 中田

山村開発センター 二F

一時三十分より三時

◎ 八月六日

京都府立盲聾学校舞鶴分校

生徒全員 平和学級 紙芝居など

九時より、養成講座 広瀬さんほか

お知らせ

◎ 講演の状況に付きスタッフ募集中です。テーマにより自分も聞きたいとか参考にしたと考えている方はご参加下さい。パワーポイント操作や資料運搬、その他サポート活動です。人数に制限ありますので、谷口米一さんに申し込んでください。